

## 研究所開設の経緯

北里大学名誉教授・小児腎疾患総合管理研究所所長

酒 井 糾

今回の講演は、良くも悪くも私の履歴書みたいな話になるが、お許しいただきたい。北里大学を辞してはや15年が過ぎた。北里には約27年在籍したが、それ以前のキャリアを付け加えれば、1966年から1969年まで米国カリフォルニア大学小児科、腎・電解質部門に留学していた。その間、小児腎不全患者の透析と移植を主たるテーマとしていた関係で、1971年新設された北里大学へほぼ帰国と同時に腎センター部へ移籍した。小児科からキャリアチェンジして腎疾患専門職、つまり保存期、透析期、移植後の管理をするという部署への配属となった。当時泌尿器科教授、小柴健先生、小児科教授、坂上正道先生の絶大な支援をいただき、腎センター部主任、小児腎疾患科主任とした役職名をいただいた。こうして小児腎疾患専門医としてのキャリアをスタートすることができた。

1973年偶然にも神奈川県予防医学協会業務部長、土屋尚様が坂上先生を訪ねられたおり、坂上先生から呼び出しがあり、予防医学協会の学校検尿事業に参加するよう指示された。この時がまさに学校検尿と私の強い絆ができた瞬間であった。ここから私の小児腎疾患の予防と管理という仕事の長い道のりが始まることとなった。約40年経った今も道半ばで単に通過点に過ぎないと感じている。

1998年北里大学を辞して小児腎疾患総合管理研究所を立ち上げたのは、インターネット時代の幕開けと重なったからである。学校検尿に関わるポータルサイトとしての役割をすることで「医療の受け手、いわば子どもを含む一般市民の医療に関わるリテラシーを自己のリテラシーとさせる」役割を果たす、こうした意気込みでウェブ上での「ストーリーテリングに対するナラティブ・インテリジェンスを養う」役割を果たすべく相談事業を開始した。これ

こそが当時学校検尿に協力してくれた小中高の生徒諸君、支えていただいた家族、学校、社会に対しての恩返しと考えてのことであった。一日30件のヒット、月約千件、年約一万件のヒット件数を確認して以降、私が当時会長を務めていた本日の講演会の主催母体である神奈川県学校・腎疾患管理研究会のホームページに私どもの研究所とリンクを張った。2013年10月現在、神奈川県学校・腎疾患管理研究会のホームページヒット件数は31万件とされており、この事実からすると我々の研究所の件数は多少低く24万件位と考える。つまり、ヒット件数の1%がビジターになるのが業界での常識なので、我々のホームページへのビジターは後ほど報告があるように、約2,400件とされているので、世間並みの数をこなしてきたと考えられる。

話題を変えるが、2013年神奈川県予防医学協会が年に一度発行している雑誌『予防医学』、学校保健特集が出た。その中で新村文男先生、竹中道子先生の記事が掲載されており、これらを読んではっきりと学校検尿事業が世代継承されているのを実感した。いよいよ学校検尿に関わる人々の国民や国家に対しての矜持が求められていると考えている。2000年に入ってから、社会環境は激変した。特に2003年の健康増進法の制定、腎関連学会主導のCKDプロジェクトの展開等々、いよいよこの先、腎疾患予防法の制定に向けて我々腎疾患医療に携わる者全てが更なる努力を傾注しなければならない時期にきたと考えている。今まで述べてきた事が、小児腎疾患総合管理研究所開設の経緯である。ここでさらに、スライドを使って経緯の補足をする。社会を変える三要素の標語(表1)に見られる一つ目は、学校検尿が行政主導で始まった経緯があるということで、まさに国の政策として制度化されたものである。

2つ目の標語は、テクノロジーの進歩で、ここでは、腎臓の機能異常や病態を極める検査が、尿を始めとして血液、生化学的検査および画像診断、細胞をみる検査、腎生検の確実性においても驚異的な進歩がみられたことを物語っている。こうした進歩は、腎臓病早期発見に対する国民（市民）の腎臓病に対する価値観にも大きな影響をもたらし、進んで検査を受ける人が多くなったことを物語っている。さらに、2003年の健康増進法の制定や学会主導のCKDプロジェクトの展開で、社会はまさに予防医学抜きでは考えられない状況になってきている。人を変える3要素（表2）に見られる標語であるが、検尿異常、さらには腎機能異常が指摘された際の本人、家族が受ける精神的ショックがかなり大きいと思われる。時と場合によっては、人生のイベント、受験、結婚を控えている場合は、なおさらである。病態によっては、在宅療養や入院までも必要とすることもあり、人生の価値観、例えば職業選択や希望校選択に影響を及ぼす事すらある。こうした時に価値観を変えることが人を変える要素となりうる。医療従事者は、今後、情緒サポートに徹することが必要になると思われる。このように、学校検尿の制度化が、こどもたちの健康志向にかなりの影響を及ぼしたのではないかと考えられる。このようなくつかの思想を持って、小児腎疾患医療の現状と課題について電子メール医療相談を開始したのが、大学を辞した1998年10月のことであった。最初に我々が立ち上げたホームページの概要を表3に示すが、今改めて思うのは、こうした活動こそが21世紀医療の社会貢献事業の一つであると考えてのことであった。

表1

<h2>社会を変える3要素</h2> <p>国・社会の制度・政策 テクノロジーの進歩 市民の価値観</p> <p>シエル・ノードストレーム</p>
---

表2

<h2>人を変える3要素</h2> <p>生理的痛み 環境変化 価値観を変える</p> <p>シエル・ノードストレーム</p>
---

表3

<p><b>小児腎疾患 総合管理研究所</b></p> <p>1998年10月 ホームページ開設</p> <p>研究所紹介 所長 プロフィール コンサルテーション 業績 エッセイ集 Kidney Q&amp;A</p> <p>相談件数 2013年10月 現在約2400件</p>	
---	---